

(論文内容の要旨)

本論文は、後漢・魏晉時代の銅鏡生産の実態を明らかにすることを目的とする。

後漢・魏晉時代は、長きにわたり中華世界を統治してきた漢王朝に陰りが見えはじめてから、異民族の侵入によって未曾有の混乱期が続いた五胡十六国時代の前代までにあたり、中国史上の転換期に位置づけられる。この時期には、儀礼用の青銅容器や副葬用の明器など様々な器物が製作され、日常雑器の1つに銅鏡を挙げられる。漢代に製作された鏡は、銘文から前漢以来、官営の「尚方」工房が主導して銅鏡を製作したと考えられてきたが、後漢以降になると、製作者名や製作地を鑄出した鏡が多数現れ、製作者(集団)・製作地が複雑化すると考えられている。後漢末の動乱期の鏡作りの様相はあまり分かっていないが、三国時代になると魏と呉で鏡生産が復興する。しかし、漢鏡と比べると製作技術が粗く、紋様も単なる模倣に過ぎず、ほとんどは質的に劣った製品であった。こうした変化は、当時のものづくりの一端を担う銅鏡からみても画期として評価できるかもしれないが、製作者(集団)に具体的にどのような変化が起きて、それが製品に反映されたのかなど、未解明な課題を多く残すといえる。

以上の問題意識に基づき、本論文では、後漢・魏・西晋時代に作られた鏡の製作時期・地域を明らかにした。具体的には、徐州(華北東部)地域で作られた各鏡式を検討し、廣漢・華西・江南など異なる地域・集団で作られた鏡の影響関係を念頭に置きつつ、鏡の製作者・集団の実態を検討した。また、魏晉時代に華北で作られた製品を検討し、後漢から魏晉への鑄鏡技術の変化についても考察した。

本論文は目的・問題点などをまとめた序章、対象資料を分析した1章～7章、鏡の製作者・集団(工人・工房)と流通に言及した終章によって構成されている。

序章「古代日中関係史と鏡研究」では、画紋帯神獸鏡と三角縁神獸鏡が近畿中央部に集中することが、日本列島における王権の成立に結びつけて理解されてきた経緯にふれた。そして近年、日中関係を反映する器物として、徐州地域で作られたと考えられる鏡が注目を集めており、鏡式ごとの細かな研究が進展していることを示した。一方、製作者・集団(工人・工房)に基づいた鏡の研究が進み、単一の製作主体が複数の鏡式を製作していることも判明している。こうした研究史に基づき、製作主体と鏡式間の影響関係を念頭に置いて鏡を研究することの重要性を主張した。

第1章「上方工房の作鏡活動」では、上方作系獸帯鏡と上方銘をもつ鏡を検討し、上方工房の変遷と他鏡式の影響関係を論じた。上方作系獸帯鏡は日本列島での特徴的な分布により、古墳時代研究で重視されてきた鏡式である。しかし本稿では、上方銘をもつ全ての鏡式を対象とした上で、製作主体に着目して分析し、上方銘をもつ鏡の変遷を明らかにすることを目的とした。上方作系獸帯鏡については、銘文型式をもとに系列を設定し、獸像表現もふまえて、画像鏡と神獸鏡の影響を指摘した。「上方作」盤龍鏡・画像鏡は、上方作系獸帯鏡との接点を見出せない。しかし、一部の「上方作」神獸鏡には共通性を認めた。そして、これらの鏡に外部から移入した神獸鏡製作工人の影響が認められることと、それらの製作時

期が遅れる可能性を指摘した。

第2章「斜縁神獸鏡の系譜」では、上方作系獸帶鏡の延長上に位置づけられる斜縁神獸鏡を検討し、年代的な位置づけをおこなった。具体的には、断面形状の検討をおこない、さらにそのほかの属性との関係を検討することにより、研究史で指摘されてきた鏡式内での2グループの特徴を明確にした。次に、両グループの銘文の字形を比較した結果、同じ漢字に異なる字形が用いられたことを示した。そして、二つのグループが製作者（集団）の違いを反映していると主張した。また本鏡式は、後漢鏡か魏鏡か判断が分かれているが、後漢後期鏡のなかでも古い上方作系獸帶鏡、および魏鏡に位置づけられる求心式神獸鏡とそれぞれ字形が共通するため、製作時期が近接する可能性があり、既存の編年観を修正する必要があることに言及した。

第3章「斜縁同向式神獸鏡の系譜」では、神獸表現の違いから、斜縁同向式神獸鏡に3つの製作系統が存在することを論じた。これまで斜縁神獸鏡や三角縁神獸鏡に含められることが多かった本鏡式を、画像鏡と神獸鏡を折衷した中間鏡式と評価する。そして、3つの製作系統が認められる背景には、鏡工人である「袁氏」と「劉氏」の存在を想定することができる。

第4章「袁氏工房の作鏡活動」では、袁氏作系画像鏡を中心に検討した。外区紋様・図像およびその他の属性との組合せから、本鏡式を3型式に分類・編年し、従来の変遷観を追認した。さらに、「銓氏」や「田氏」などの工人が、「袁氏」と同様の意匠をもった鏡を製作していることを指摘した。そして、それぞれの工人が袁氏作系画像鏡のどの段階に活動していたのかを検討することで、「袁氏」を代表とする工房の実態を復元的に提示した。

第5章「列島出土神獸鏡の系譜」では、徐州で一人の工人（一つの工房）により作られた可能性が高い神獸鏡を中心に検討した。まず、劉氏銘をもつ鏡全体を対象にして検討をおこない、「劉氏」銘鏡の中に、図像や銘文などの特徴において酷似する例を見出した。こうした「劉氏」銘鏡の特徴を別鏡群と比較し、「九子」など四川・華西地域の鏡製作者から影響を受けたと想定した。次に、神獸表現が酷似する「吾作」画紋帯環状乳神獸鏡の一群をとりあげ、これらの鏡群が、外区の半截菱雲紋が共通する求心式神獸鏡の製作時期に近接する可能性が高いことを指摘した。

第6章「獸首鏡の系譜」では、獸首鏡の紋様に注目して、その編年案を提示し、製作系統の違いを論じた。まず、紀年銘鏡と出土墓葬の検討から、紋様の変化を検証した。これまで、獸首鏡は後漢代の廣漢郡で製作されたと考えられてきた。しかし、それら以外にも、主紋様・銘文・製作技術などが異なる一群が存在し、これらは、長安に製作地を移した集団によって作られたと論証した。また、魏の年号である「甘露五年」銘獸首鏡を観察して製作技術の痕跡を見出し、異なる鏡式の魏鏡とも比較することで、鑄型（もしくは原型）の一部を改変・補修して量産を志向する、魏の官営工房の鑄鏡技術に言及した。

第7章「双頭龍紋鏡の系譜と魏晋社会」では、後漢～魏晋時代の双頭龍紋鏡を検討し、九品官人法によって貴族制が進んだ当時の時代背景と関連付けた。製作時期の新しい双頭龍紋

鏡を後漢末か西晋かどちらに位置づけるかは、日中の研究者で見解が割れていたが、出土墓葬の様相をほかの魏晋鏡の比較することで、補正案を提示した。そして、西晋代に作られた双頭龍紋鏡の出土墓葬をふまえると、官僚の格差が拡大したことを反映して、立身出世を願った双頭龍紋鏡（別名、位至三公鏡（位は三公に至らん））が流行したと結論づけた。また、本鏡式が広域に分布する現象と連作鏡の状況を示す製作技術を検討し、大型魏晋鏡とは、製作・流通原理が異なることを論じた。

最後に終章「鏡工人・工房と三角縁神獸鏡の特質」では、各章の検討を踏まえ、後漢から魏晋にかけて、製作技術のみならず、製作主体である工人・工房の実態も変化していたことを示し、その背景について論じた。具体的には、後漢時代は一人の工人や二桁未満の工人が所属する工房によって小規模な生産がおこなわれていたが、魏晋時代は「尚方」などの大規模な工房によって同範（・同型）技術を用いて、大量生産がおこなわれていたと述べた。そして本論文で得られた銅鏡の製作地の視点から日本列島出土鏡を俯瞰し、近畿中央部とそれ以外の地域では、前者が徐州、後者がそれ以外の地域で作られた鏡が出土することに言及した。

本論文では、さまざまな鏡式を網羅的に扱い、各章で他鏡式の影響関係を意識したことによって、後漢・魏晋鏡の有機的な位置づけが可能になったと考える。また、鏡の分類と製作主体を紐付けることによって具体的な工人・工房の様相を明らかにすることができ、当時の鏡生産の実態を明らかにするという、本論文の目的をある程度まで達成できた。今後は、日本での出土状況の検討をより緻密に進めるとともに、日中交流を反映する鏡以外の器物にも目を向けて研究を進めていきたい。